

かんど 神戸堰

アーチが描く流水の美を再び



神戸堰は、神戸川の JR 山陰本線鉄橋の下流にある農業用の取水堰で、下流兩岸の高松、東園、知井宮、神戸等にかんがい用水を送る水源となっており、北原樋、法宗樋、徳連樋、上来道樋、下来入道樋等の樋門がありました。

神戸川上流地方は、古くから砂鉄の生産地で、砂鉄採取が行われていました。いわゆる鉄穴流しといわれるもので、この砂鉄採取によって流される砂は下流に堆積し、年々河床が高くなっていきました。これはそれぞれの樋門から水を取り入れることをたやすくしましたが、反面、水に脅かされる日々でもありました。

しかし、たたら製鉄の衰退に伴って河床が年々低下していったため、大正 8～9 年頃から取水が非常に困難になりました。結果、流域の 700ha の水田は用水不足により収穫が減少し、安定した農業用水の確保が求められました。

また、古くからあった堰は現在の堰より上流に、石を積みあげただけの簡単な造りだったため洪水の度に壊れ、流されました。その度修復に多大な労力と経費がかかり、この抜本的な対策として計画されたのが従来の 5 樋門を統合し、出雲平野の西部一帯を灌漑する農業用水取水用の堰とする神戸堰です。

出雲平野は斐伊川と神戸川の沖積作用によって海が陸地となったため、軟弱地盤です。しかも当時はコンクリートが非常に高価な資材で、堰の重さを軽くするためにもコンクリート量を軽減する必要がある、アーチ形式が用いられました。

神戸堰の形式は鉄筋コンクリート連続アーチ形で、右側に 5 連、左側に 3 連、計 8 連造られており、中央に幅 5m の突出型の魚道、両端に土砂吐き用の水門があります。堰の上流に湛えられた水は、アーチ形の堰の天頂に表面張力を漲らせ縁取り、天端を越えたとたん白い筋を引いて落下し、乱流となって流れ落ちます。その独特の水景は地域の人々にも親しまれてきました。

大正 15 年に着工、昭和 3 年に完成した神戸堰は、日本でも初めての鉄筋コンクリート連続アーチ形式の農業用施設で、その規模、構造共に珍しく土木的価値を有していましたが、斐伊川治水事業に関わって取り壊されました。現在、元の位置付近に新たに建設された可動堰の一部に弧を描くアーチが取り入れられています。

■位置図



概要

位置	神戸川河口から 7.5 km 地点
建設事業者	島根県
管理者	出雲市
型式	鉄筋コンクリート連続アーチ形式
堤延長	94.55 m / 高さ 1.82 m /
総建設費	87,148 円 (当時)
工期	大正 15 年 11 月～昭和 3 年 3 月



かつての神戸堰（昭和 3 年）
アーチを滑り落ちる流れが美しい水模様を描いていた。

改築後の神戸堰
斐伊川放水路事業で改築された神戸堰にも、アーチ形の落差工が設けられた。

